

雄大な山形、レリーフのお墓

第1回の大賞には東京都江戸川区の山本久子さん（当時60歳代）が建立したお墓が入賞した。

亡くなったお父さんがスキーの指導員だった。また、家族全員がスキー好き。だから石屋さんに頼んで、洋型のお墓に交差する2本のシュプールを彫ってもらった。シンプルでありながら、一つの家族の生き様、共通の心や願いをシンボライズしたお墓。墓の前に立つだけで、ありし自の故人の鮮やかなストックさばきが蘇ってくる。山の形、斜面に描くシュプールと楽しみながらどんどんイメージが膨らみ、何回も打ち合わせをしながら山の斜面に2本のシュプールとなった。おまけに香炉までも山のロッジ風で、煙突から煙が出る仕組み。シュプールは、現場まで、行って自分でラインを描いた、という。



第7回の特別賞には島根県松江市の田崎陽子（当時38歳）が入賞した。田崎さんは語る。母の一周忌までにはお墓を建てようと思い、いろいろ見学に行きました。しかし、ほとんどの墓が同じに見えました。それでただ墓を建ててしまうのではなく、その場所に足を運ぶたびになくした人を忘れず、思い出を大切に、未来に向かって頑張る力を与えてもらえるようにとイメージした、三つの山並みをデザインに入れました。その一つは両親の古里九州（久留米）、二つは家族四人で暮らした宮崎、そして山陰松江。墓地は大山（出雲富士）が一望できる場所を得ることができました。母は、四季折々の自然、木、花、山野草に親しみ山々を散策しました。その母の好きな言葉は「木・空・風」でした。それを題字に刻みました。



第 8 回で入賞した静岡県富士市の勝又 道子さん(当時 48 歳)のお墓は、墓石自体は普通の洋風墓だが、脇に建つ墓誌に思い出深い尾瀬の風景をレリーフした水芭蕉の向こうに、残雪の残る至仏山を描いてある。<亡き主人が何度も訪れたことのある尾瀬を思い出の形にしたいと思った、という。



第 11 回には北海道岩見沢市の水本 康博さんが故郷忘れじがたし、思い出の山並み型お墓で入賞した。長年にわたり教諭の仕事をしてきました。転勤が多く、各地方の街の良いところは知りつつも(今は最終退職の地、岩見沢市に暮らしてはいますが)、お墓=安住の地だけは、せめて、小さい時から育った、田舎の故郷(ふるさと)の地という強い念を抱いており、退職を機に、お墓を建てた次第です。お墓建立に際してのキーワードは、やはり、「故郷(ふるさと)を想う」であり、墓石本体の黒みかげの建石は、小さい時から見て育ち、今でも変わらない故郷の山の形で、3つの山からなる山並みは、忠実に表現し、山の谷間から流れてくる川の流れも削ることで合わせて表現しています。彫刻した「望」という字にも、故郷を想う気持ちがこもっています。(私の自筆)



第 12 回で入賞した千葉県我孫子市の秋山 賢一さん(当時 40 歳)のお墓は、3重に連なる山型お墓。昨年の7月に父が他界しました。父は、最期まで家族を思い母、兄弟、妻、子供達を大切にして協力し合うことを教えてくれました。そんな父は、山のふもとで生まれ育ちました。自然の中で色々な事を学びまた遊んだそうです。特に秋は、山が紅葉してその自然の雄大さがとても気に入っていました……秋山という名字のせいかも? 又頑固な建具職人で、いつも木の香がしている父でした。こんな父の事を思い、大きな山を3段に重ね段をつける事により、お互い協力しあう事を表現し、立体感も出すことにしました。秋の山が好きだったので、紅葉をイメージして紅い石を使用



して頂きました。

第 12 回には仙台市青葉区の牧田徳子さん(当時 69 歳)のお墓が入賞した。山旅で拾って集めた記念の石に囲まれた山がテーマのお墓。

「悔いのない人生を送りたい」。定年退職を 3 年後に控えたある日の朝。夫が床のなかでつぶやいたこの一言から、私達夫婦の二人三脚の 370 余の「山旅」が始まりました。スタートは近くの低い山々への日帰り登山でしたが、車にシュラフや炊事用具を積み込み、徐々に高い山々へ挑戦しました。早朝 5 時、うす暗く静まりかえった山道をただひたすら夫の背を見ながら登山をスタート。山頂までの苦しい道のりは頂上に立った時に無限の喜びと変わりました。記念にと登った山道からいただいた「石」。夫はその全てを愛しそうに眺めながら自分の亡き後は、この石たちに囲まれていたいと申しおりました。その大切な石と晴天の日に撮った焼岳からの美しい穂高連峰の山並みを石材店のアドバイスをいただきながら、この様な形で表現してみました。墓碑の前に立つと脈々と思いが甦る。そんなお墓になったことに感謝し、いつの日か私も石たちに囲まれながら夫の隣で思い出話ができるだろうと思いを馳せています。



同じく第 12 回には新潟県新発田市の安藤眞知子さんの立体的なピッケルが彫刻されたお墓が入賞した。生前、登山を趣味にしていたご主人の思いを墓石に刻みたいと思い、以前日本アルプスに行った時のバッジのデザインをモチーフに、ピッケルを立体的に彫刻し、側面には山脈を刻みました。また石材も山の自然に合わせグリーン系の石を使用している。



13 回で入賞した群馬県吾妻郡の神田 由美さんのお墓は、山型のお墓に、アプローチは溪流。神田さんは語る。生前、自然が大好きで、愛した母親の意思をお墓にしたいと思い、石材店さんと相談、墓石自体を山型にカットしてもらい、アプローチに溪流をイメージしたデザインで施工しました。墓所が群馬県草津で、自然にマッチし故人の想いを反映したオリジナルなお墓に仕上がりました。



第 18 回で仙台市泉区の小野 洋子さん(当時 57 歳)は病死した亡夫のお墓入賞した。ご主人が好きだった山並み(泉ヶ岳)、そこに至る一本の道。山腹に満開の桜の樹が彫刻される。若い頃、モトクロスを趣味にしていたご主人の愛用バイクを立体的に彫ってある。桜舞い散る中を、ご主人がバイクで走駆するイメージが彷彿とする。「私達家族のために懸命に働き 54 歳という若さで逝ってしまった主人に感謝の思いを込めたものにしたいという、私達の願いが込められています。」と語る。



第 20 回で入賞した香川県高松市の矢野三枝さん(当時 58 歳)さんは、亡きご主人の生まれ育った故郷の山々を思わせる 3 つの峰をもつ山型。三尊を暗示し、過去・現在・未来を象徴する。墓石には桜の花を彫刻。あの世でもさびしくないように可愛い犬の置物も添えてある。

